



2013年12月4日(水)夜、わたくしガッタは for you...ではなく朋友、三毛乱治郎さんと一緒に、アントネッロ主催モンテヴェルディ三大オペラ第二弾「音楽寓話劇《オルフェオ》(L'ORFEO)」を観に、京浜東北線「川口」駅前にあるリア音楽ホールへ行ってまいりました。(2013.12.5 記)

R : オルフェオ役の人って若手の方だと思うんだけど、所作に昭和 20 年代生まれの日本のおっさんみたいなのがあるって、ちょっと不思議だったな、おいら。でもだから「おバカな夫」が強調されていたように思う。

G : 賢い妻と愚かな夫ね。私はエウリディーチェの帽子を見たら、丹沢の山で見たキノコを思い出したわ。それからみんなが肩にかけていたセラペスを見て、湘南のサボテンが懐かしくなった。

R : でもペルーの帽子と衣裳はカラフルで目に楽しかったね。高原の部族が思い浮かんだ。それと左右からの登場の仕方が学校劇みたいで庶民的だった。動きの密度は濃かったよね。

G : ところで堅琴を弾く所作って難しいのかしら？他の日本のオペラでもそうだったけれど、猫が何かを引っ掻きそこなっているみたい。張りぼての堅琴じゃ、触ると壊れちゃうのかしら？

R : どうかな。ところで、おいらたち褒めてるの、けなしてるの？

G : そうだった、真面目に行きましょう。

■ ヴァイオリンがよかった

ヴァイオリンが音合わせを始めた時、何だか一般のオケのヴァイオリンと空気感が違うような気がしました。一般のは他の演奏を牽引する感じで、これは誘導する感じ。独特な雰囲気がありました。

■ 指揮と演奏がよかった

演奏が始まった時「きれい！」と気分が急上昇。だからそれを聴いて「モンテヴェルディさんってなんて美しい音楽を作るのでしょうか」とポワツとなりました。音楽の構成は盛り上げ方が効果的。全身で曲を表現する指揮者は音楽の光りの中で輝いていました。

■ 照明・字幕・コーラス隊などの配置がよかった

最初の力強い太陽と、川を表す照明がよかった。コーラス隊を客席両脇に配置したのも GOOD。ある歌詞の一部が耳にとどまった時、あれ、字幕とは違う... つまり字幕は内容を凝縮していると痛感しました。とても簡潔で分かりやすい字幕です。

オルフェオが天国の父と話す場面の人物配置は、海外版「リア」を彷彿とさせましたが、この遣り取りの場面は、これ以外に最適な配置はないと思います。

■ 技術と感情

全員が技術的には遜色なしの粒ぞろい。けれど部分的にエコーが入ったから音響さんの力もあったかも。ただ技術を整えた反面、感情的には、楽しさと悲しさの差がなさ過ぎたように思います。

■ 総体

皆様の一所懸命が伝わった舞台です。演技的には技術が勝っていたので、内面的感情で惹きつけるのではなく、教訓的に淡々と事実を示したという感じでした。したがって演じる側は事実の提示のみ。楽しい場面も悲しい場面も、感情の処理は客に委ねられ、観客が自ら楽しみや悲しみを拾い出し、判断を下さなければならないタイプの舞台だと思いました。即ち演奏に触発される客の感性が大事。

愛する者の望みを叶えるために身を引く決意をする黄泉の国の大王、自分を愛する者の苦しみを救おうとするエウリディーチェ、自分の愛を一心に貫こうとするオルフェオ。本当の愛って何でしょうね。リアのスノーマンさん、どう思いますか？

